

共通論題 ①～②

**【共通論題】国際文化学の教育方法としてのスタディツアー
—「知識」から「現実感を伴った知性」への転換のために—**

代表者：坂口可奈（北海商科大学 商学部 講師 sakaguchi@hokkai.ac.jp）

1. 趣旨

おそらくすべての学問にとって、教室で学ぶ「知識」は出発点に過ぎない。この点をかんがみると、国際文化学を学ぶにも体験や実感が不可欠である。そこで、本セッションでは国際文化学の教育方法としてのスタディツアーについて議論していきたい。

インターネットの出現により必要な情報を簡単に得ることが可能となった今、学生は「見たい情報」の獲得のみで満足し、学習・研究プロセスから行動や実感が排除されがちである。また、アクティブ・ラーニングが提唱されて久しいが、アクティブ・ラーニングは必ずしも「現実感を伴う知性」の獲得につながっていない。このような状況では、他者理解に必要な「見えていないものを見る」態度は身に付かない。

本セッションの報告者は、「どうすれば学生に現実感を持ってもらえるのか」という疑問を抱きつつ、歴史や国際関係そして異文化（すなわち他者）理解を教壇から語ってきた。その一方で現地に触れることで触発された学生・生徒の変化に驚いた経験を持ち、スタディツアーが「現実感を伴った知性」を養う不可欠な要素であるとの仮説を得た。

本セッションで議論するスタディツアーとは、「ある場所や現場に立ち、そこから時間と空間の広がりを感じ、現在を形成する文化・歴史・政治経済・国際関係・自然を実感し、これらを結ぶ相互関係を理解する」ものである。その目的は「現実感をともなった知性」の形成に他ならない。従来、スタディツアーに関する議論は実践例の紹介が主であった。しかし本セッションでは実践例の紹介だけでなく、改めて国際文化学の教育方法としてスタディツアーの重要性と意義を論じ、そのフレームワークを提示する。

2. 発表者と概要

(1) 坂口可奈（北海商科大学商学部講師）

「スタディツアーの定義とフレームワーク」

本報告では、他者理解のための教育方法（アクティブ・ラーニング）の一つとしてスタディツアーを位置付けるべく定義を明確化し、実際に行う上でのフレームワークの提示を試みる。

(2) 藤田賀久（多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師）

「スタディツアーの意義と可能性——何をテーマに設定するか」

スタディツアーは自分と他者・他文化との関係を可視化する実践である。しかし、「見たい対象」以外が視界に入らなくなる陥穽もある。この点を中心に、台湾スタディツアーの実践例から議論する。

(3) 鄭文琪（多摩大学グローバルスタディーズ学部国際交流課主任）

「大学が持つスタディツアーの可能性——地域の国際交流の拠点化に向けた挑戦」

地域は世界と繋がっているとの観点から本学は「グローバル教育」に取り組み、地域連携でスタディツアーを構築してきた。地域の国際交流拠点という大学の役割からスタディツアーの可能性を議論する。

(4) 谷口天祥（藤沢翔陵高等学校教諭）

「高等学校におけるスタディツアーの実践例——生徒に何を考えさせるか、生徒は何を感じたか」

本報告では高等学校における修学旅行について紹介したい。修学旅行で目的や内容、感動を教員と生徒が共有できているかが教育効果に関係する。歴史と文化は机の上だけでは勉強できない。一方、事前学習や課題設定なくただ現地を訪れても勉強にはならない。

共通論題②

【共通論題】東南アジアの映画は家族をどう描いてきたか

アジア諸国において、経済成長、民主化、グローバル化の進展は、中間層の拡大とともに、個人の自由を重視する価値観や西洋近代的な価値観の大衆化をもたらした。この結果として、伝統的な価値観と個人主義の相克や宗教の活性化などの反応が入り混じりながら、社会の中で多様な価値観のせめぎあいが生じている。このせめぎ合いはとりわけ家族に顕著にあらわれている。

本共通論題では、家族をめぐる規範や価値観を見る方法の1つとして映画を取り上げる。映画は、新しい価値観や世界観を提示して社会を先導しようとする先鋭的な側面を持つ一方で、観客が劇場に足を運んで鑑賞料を支払って観覧することで興行として成立する側面も持つ。とくに後者の理由から、映画とりわけ商業映画は、社会のニーズや欲望を念頭に置いて制作され、そこに社会のニーズや欲望を読み取る素材になりうる。

本共通論題では、映画が国民的な娯楽の地位を占める国で、宗教が社会の重要な要素となっているとともに西洋近代的な生活様式も取り入れられている東南アジアのフィリピン、インドネシア、タイを事例として、それぞれの国で制作・公開された映画に描かれる家族像を分析する。

司会: 山本博之(京都大学)

発表1 「フィリピン映画に描かれる家族のかたち」 山本博之(京都大学)

海外出稼ぎ労働の多さで知られるフィリピンでは、母親の不在による家族の紐帯の危機が主要な問題の1つとなっている。フィリピンの映画に描かれる海外出稼ぎ労働者とその家族の物語を通じて、フィリピンにおける幸福のあり方と家族の関係について考える。

発表2 「映画が映すインドネシアの家族像」 西芳実(京都大学)

家族主義により権威主義体制が正当化されてきたインドネシアでは、1998年の民主化後、「強く正しい父親」にかわる父親像が模索されている。インドネシアの映画に見られる父親像を通じて、インドネシア社会が父親と子の関係をどのように捉え直そうとしているかを考える。

発表3 「タイ映画に見る子と親の関係」 平松秀樹(京都大学)

報恩の価値観が社会の基底にあるタイでは、親の意に沿わない恋愛・結婚や同性愛を親不孝とする根強い考えがある。タイ映画に見られる家族の物語を通じて、親不孝になることを避けながらも人生のパートナー選択の自由を模索してきた現代タイ社会の試みを読み解く。

コメント: 青木恵理子(龍谷大学)